

2023年（去年）、もっとも衝撃を受けたこと

高田太樹先生の研究授業に学生を連れ出した
ダニエル電池を教材にした探究的な授業だった
授業後、高田先生が、ご厚意で、学生と話をす
る時間をとってくださった

「どんなことでも質問してください」

に対する第一質問が、

「朝何時に来て、何時に帰るのですか」

という勤務形態の質問だった

大学で授業をやり出して感じていること

- 「らくたん」が喜ばれる、「タイパ重視」の学生が主流
- 免許の取得が目的の学生の方が多い — 教員になるのが目的で教職課程を選択しているわけではない
- 人数が多く、模擬授業は希望者のみだったり、グループ単位で計画・実施したりするのが当たり前になっている
- 模擬授業は、チョーク&トーク。ワークシートがあっても、穴埋で知識の詰め込み形式、まるで学習塾のような感じ
- 学生はスマホの日常使いはできるが、模擬授業でPowerPointやForms、Jamboardを使う学生は少数派

大学で授業をやり出して変えたこと


- **まずはやる気** 今なら教員になりやすいこと（競争率は2倍）、公務員の正規採用で終身雇用が保証され、しかも、給料がよい（令和6年の新卒は初任給26万円超）ことを力説
- **楽しい授業** 講義形式の授業は撤廃し、何らかの観察・実験や実習を伴う授業形式、授業中に話し合い活動を取り入れる
- **「楽単」化する** 試験・レポートなし、指導案は略案だけで、ただし一度は添削する
- **厳しくもする** 後半に模擬授業あり、1人ずつ全員行う、しかも2回
- **スキルを身に付けさせる** 私自身がYouTubeやPowerPoint、Forms、Jamboardなどを日常的に使うのは当然として、模擬授業で使うことを奨励（使った学生をほめて、ほめて、ほめまくる）する

指導案を作成する意味は…

- 形式はいろいろ
主に「細案」と「略案」がある
教育実習では「学校（自治体）独自の形式（5割）」「大学で学んだ形式（4割）」「自由でいい（1割）」「メモでいい（なし）」など
- 授業をする前の整理の側面
「単元の目標」と「本時の主題」「評価規準」など
「指導観」「教材観」「生徒観」「授業観察の視点」など
「単元指導計画」「本時の学習指導」「評価計画」「板書計画」など
- 授業の記録、再現の側面
文科省が新たに定めた「学習指導要領コード」
発問・指示は話すそのままのセリフを指導案に書き表す

私の授業での指導案作成の「きまり」

1. 指定されたテンプレート（書式）に合わせる。
2. 単元名は、学習指導要領と教科書の両方と記載する。
3. 指導計画で「本時」や「観察実験」は目立つように記載する。
4. 3観点でそれぞれに少なくとも1回は「記録に残す評価」をする。また、1つの観点では1回か2回程度で十分。
5. 主題や発問・指示は生徒が行動しやすい表記を心がける。×「理解する」×「知る」○「発表する」○「作図する」
6. 発問・指示は、枠を横断して目立つように記載する。また、授業で話すそのままのセリフを記載する。
7. 記録に残す評価の具体的な方法を指導上の留意点に記載する。



理科では「探究」が重視されている

- そもそも、なぜ探究的な学びが求められるのか…
- 変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく
- 様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていく
- 複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにする



評価の3観点とは？

平成29年改訂で、学習指導要領の目標及び内容が「資質・能力」の三つの柱になったことを踏まえ、評価の観点の文言が変わった

- 「知識・技能」
- 「思考・判断・表現」
- 「主体的に学習に取り組む態度」

- 平成20年までは…
- ×「知識・理解」
 - ×「思考力・判断力・表現力」
 - ×「関心・意欲・態度」

実験をする前の「予想」は、どんな場面で必要か？

実験をやってみて
それで気付くこと
から探究が始まる

日常の経験からあ
えて予想をさせる
場面はあり得る…

「机間巡視」は使わなくなっている

「巡視」が教育で
はなく、警察をイ
メージさせるから

「机間指導」とい
う語句が普通にな
っているから

よい授業を構想する第一の条件…

~~聴く~~

~~見る~~

~~写す~~

生徒の活動

よい授業を構想する第一の条件…

話し合う

発表する

実験する

まとめる

作図する

よい授業を構想する第一の条件…

話し合う

発表する

生徒の活動

まとめる

作図する

何ができるようになればよいかを示しているか
それは、教師が観察可能な行動を表す言葉か

ふさわしい語句

～が言える。～を発表する。～を説明する。～の理由が述べられる。～について指摘する。～の計算ができる。～を作る。～ができる。～を書く。～を操作する。～を完成する。～のデータが集められる。～を測定する。～を検出する。～を分類する。～を図示する。～を証明する。～の条件を選びだす。～について一般化して述べる。～について理由を挙げて論証する。～の表を完成する。

避けたい語句

～を知る。～を理解する。～を身に付ける。～を考へ（考察す）る。～の考へを深める。～に着目する。～を育てる。～を推論する。～に関心をもつ。～の自覚を深める。～をつかむ。～を養う。

指導案を通して授業の構想を説明する

1ターン4分×班の人数

1. 授業者から指導案を説明する
2. 特に、**生徒にどんな活動を求めるのか**、補足する



1人一言ずつ、質問やアドバイス、気づいたことを述べる

模擬授業のイメージ

50分授業を15分で行う

模擬授業のイメージ

通常の授業の場合
(例)

時間	学習活動
5分	導入
10分	話し合い
15分	
20分	実験
25分	
30分	
35分	結果の整理
40分	考察
45分	まとめ
50分	振り返りForms

今回の模擬授業の場合

最初を実施		後半を実施		中抜けしての実施		
時間	学習活動	時間	学習活動	時間	学習活動	
5分	導入	省略する	省略する	5分	導入	
10分	話し合い			省略する	10分	話し合い
15分					省略する	
省略する		40分	考察	省略する		
省略する		45分	まとめ			
省略する		50分	振り返りForms			

よい授業を構想するためには…

1. 授業が、知識の伝達が中心になっていないか — 思考・判断・表現や態度を評価しているか
2. 生徒がもともと持っている生活経験や既習の知識や技能を生かしたり、前時までに獲得した知識や技能を定着させたりする機会になっているか
3. 学んだことの意義や有用性を実感する機会になっている
(×教え込み) (×教師主導) (×上から目線) (○生徒から引き出す) (○児童目線)

指導者の条件

自然に身に付いている場合がある

聞き取りやすい声
豊かな表情とジェスチャア
思わず引き込まれる話術

授業をする際に重要なこと

1. 口調、声量、言葉遣い、滑舌や話のスピード
2. 視線
3. ワークシート
4. 授業の構成や時間配分
5. 板書の工夫、スクリーン (ICT) の活用
6. 生徒の行動・活動や発言に対する柔軟な対応
7. 癖を知る

よく言われること

1. まずは教師が授業内容に高い興味・関心をもつ（態度を示す）「今日の実験はすごい!」「この現象は不思議（謎）です!」
2. 発問・指示は話すそのままのセリフを指導案に書き表す
3. 教師がしゃべり過ぎない（しゃべらない）のがよい授業
4. 黒板の左上にその時間の目標（主題、めあて）を書く
5. 一度書いた板書は消さない、授業後の板書を見ると1時間の構成が見て取れる
6. 机間指導を必ず行う、どの授業でも、観察実験を1回は取り入れる

- ワークシートは、授業の進行に役立ちます。授業の主題の達成に役立つ生徒視線で作成しているか。調べればわかる穴埋め式の問題集のようになっていないか、点検してください。
- 板書は、写真や図、動画をそのまま投影できるスクリーンに押されつつありますが、それでも必ず使えます。
- 板書には、①見やすい文字サイズ（1文字は手のひら程度）、②2色以上のカラーチョークを使って内容を強調、③大事なフレーズは、文字囲いやアンダーラインでマーキング、④行は水平にバランスよく、などのポイントがあります
- 生徒の呼び方は、授業中と休み時間では異なります。授業中の呼び捨ては人権問題です。以前は男子を「〇〇くん」と呼んでいましたが、現在はジェンダー問題を意識して男女を問わず「〇〇さん」と呼ぶのが一般的になりつつあります。
- 無意識の癖に気付くチャンスにしましょう。「えー」「そう」「はい」などを繰り返すような口癖や、言葉に詰まると「視線をそらす」「鼻を触る」「頭をかく」などの行動癖が自分にあるのか、模擬授業で確認しよう

付け足し

教育実習を終えた4年生の感想 — 人間関係形成能力がポイント —

テーマ「やってよかった、という教育実習にするためのポイント」

提案者

- 第1位 生徒との関わる時間を増やし、コミュニケーションをたくさんとる!
- 第2位 先生方とも良い関係を築く。
- 第3位 1日の予定は、前日のうちに決めておく!
- 第4位 事前に、指導教員の動き方を知っておく!
- 第5位 実験を取り入れる!

やってよかったという教育実習にするためのポイント

提案者

- 1位 生徒とのコミュニケーション
- 2位 先生とのコミュニケーション
- 3位 教材研究
- 4位 睡眠
- 5位 ICT活用